読書の秋、郷土研究「上方」の上方風水害号を開いてみた

読書の秋である。大阪の郷土史にふれた郷土研究「上方」（上方郷土研究会編輯）をひもといていると、昭和9（1934）年の第46号・上方風水害号が目についた。同年秋に甚大な被害を京阪神にもたらした室戸台風が特集されている。普段は文化的で風雅な雑誌だが、あまりの惨状に緊急編集されたのだろう。台風の直後、10月1日に発行された。

お彼岸でもあった9月21日の午前5時頃、室戸台風は高知県室戸岬付近に上陸した。淡路島付近を通り、大阪神戸間に再上陸し、京都から若狭湾へと抜けていった。死者2,702人、行方不明334人、負傷者14,994人。家屋全半壊および一部損壊92,740棟、床上・床下浸水401,157棟、船舶の沈没・流失・破損27,594隻という大災害だった。

台風が大阪に上陸したのは午前8時前である。現代のように台風情報や避難勧告が、すぐに市民に伝わるわけではない。不幸にも学校の登校時刻であった。最大瞬間風速60mの強風で市内の小学校のうち古い木造校舎のある180校の480棟が全半壊や大破し、小学校の死者は児童251人、教職員9人、保護者7人で、重軽傷者は合計1,571人に上った。残された人々も痛恨の思いだったのだろう。二年後の昭和11（1936）年、教育に関する殉職者・殉難者を慰霊する「教育塔」が大阪城公園に建てられている。

強風は文化財も破壊した。四天王寺では五重塔と仁王門が全壊し金堂も大破する。「上方」は毎号表紙が優雅な木版画だが、浮世絵師の長谷川小信が描いた表紙の災害の描写は、いつもと違う緊迫感がある。地上に落ちた塔の相輪や、頭部にサラシが巻かれた仁王像。前の人の腰を両腕でつかんだ一群が、掛け声とともに何か引きずり出そうとしている。

倒壊した四天王寺の五重塔（郷土研究「上方」より）

高潮の被害も悲惨だった。4メートルを超える高潮が襲い、大阪湾一帯の溺死者は1,900人以上とされる。惨禍を伝えるのが右の写真である。上部に写るガスタンクが現在の京セラドーム大阪のある場所で、手前の岩崎橋にまで無数の船が津波で押し上げられ、尻無川を埋め尽くしている。水上生活者もいたはずだが、どうなっただろう。

川を埋め尽くす被災した船（郷土研究「上方」より）

さらに悲劇だったのが、ハンセン病療養所「外島保養院」（現・西淀川区中島）である。大阪湾と神崎川に面した海抜ゼロメートル地帯にあり、高波で入院患者のうち173人が亡くなり、職員3人、職員家族11人ほか工事関係者9人が命を落とした。平成9（1997）年、「らい予防法」の廃止を記念して、「外島保養院」と関係の深い国立療養所邑久光明園入園者自治会が、保養院の跡地に碑を建立している。

復旧を陣頭指揮した關一市長も、台風の翌年である昭和10（1935）年、国への陳情に東京・大阪を行き来するうち、心身をすり減らしたのであろう、チフスのため死去した。享年61歳の若すぎる死である。天王寺公園で大阪市初の市葬が営まれた。

「行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまりたるためしなし（鴨長明『方丈記』）」は、たてつづく大火災、竜巻、飢饉、大地震に無常を感じて「世の中にある人とすみかと、またかくの如し」と述べているが、コロナ禍や豪雨にふりまわされている現代にも、この古典文学の一節がリアルにあてはまる。

筆者プロフィール

橋爪 節也　はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』（創元社）など。